

疫病流行を告げる「クタベ」と越中立山に現れた理由

細木ひとみ

はじめに

令和2年は、新型コロナウイルス感染症の流行により、これまでの生活に多くの変化がもたらされた年といえる。立山博物館も、四月に全国に緊急事態宣言が出されたのに伴い、四月十八日（土）から五月十日（日）まで臨時休館し、その後予定していた二つの記念展のほか、ほとんどのイベントを中止または延期とした。また、来館者には感染拡大予防策として、入館時のマスク着用、アルコール消毒、間隔をあけての観覧をお願いし、まんだら遊苑の展示制限なども行った。

このような、未知の病に対する不安が広がりつつある中で、まず疫病の流行を告げる予言獣「アマビエ」がその愛らしい姿から二月ごろより話題になり、大人気となった。注目された「アマビエ」とは、京都大学附属図書館所蔵の「肥後国海中の怪（アマビエの図）」に記されているものである。

その後、三月に水木プロダクションによって同じ予言獣である「クタベ」がSNSで紹介されると、たちまち当館のクタベ模型⁽¹⁾やクタベ缶バッジも話題となった（写真1）。どちらも、令和元年度の夏に開催した前期特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」（令和元年七月十三日～九月一日開催）で、立山ゆかりの妖怪クタベを紹介するにあたり、「多くの方に知ってもらいたい」「親しみをもってもらいたい」という思いから製作したものであった。また、この特別企画展では、一般的に使用されている「妖怪」とそのまま表現せずに、「不思議な存在」ということを強調したいと思い、企画展用にと考えた「霊獣」という言葉を用いて表現していた⁽²⁾。しかし、人気の高まりと相まって、報道機関からのいくつかの取材を受けたこともあり、いつの間にか「疫病退散に効く」として、富山県内では肥後国のアマビエより「立山ゆかりの霊獣クタベ」として人気となっていたのである⁽³⁾。



写真1 立山博物館のクタベ模型

そして、クタベに関する質問や商品についての問い合わせもたくさんいただき、その都度、資料をもとに紹介していたのだが、現代社会ではSNSの普及などもあり、「人から人へ」とつながることで話（情報）が変化していくということを痛感した。学芸員と言う仕事柄、「資料」という目で見える証拠を一番大切にするのであるが、実際には原資料を目にするよりも、人から人への「〇〇さんから聞いた」「新聞やテレビ、SNSで紹介されていた」というほうが話も拡散していくのである。悪く言えば、「どこからその話が生まれたのか」や「その話が正しいのかどうか」ということよりも、人から与えられた情報の中から自身が求める情報であればそれをそのまま信じ、さらには途中でどのように話が変わっているかも考えずにあたかも本当のことように語るという現象に驚いたのである。これについては良し悪しも含めて課題も多いが、伝説や噂話の成り立ちを考えるにあたって良い題材ではないかとも思える。もちろん、私自身も噂話を信じてしまうこともあるし、あたかも見てきたように大袈裟に話すことはある。しかし、立山信仰を研究する一人として、人々の「信心」の成り立ちにも通じるものがあると感じたのである。

それにしても、なぜ「クタベ」と名乗る不思議な妖怪が越中立山に現れたのであろうか。そして、この話を語るのは誰なのであろうか。立山信仰の中心拠点の村である、芦峯寺・岩峯寺両集落をはじめ、県内外の

立山関連の寺社、立山を訪れた人々の参詣記にも「クタベ」についての話は記されていない。つまり、「立山に伝わるクタベ」ではなく、「立山に住む（と言われる）クタベ」なのである。

そこで本稿では、クタベについて改めて紹介するとともに、クタベが現れたのが「越中立山」であった理由について考えていきたいと思う。

1. 越中立山のクタベとは

まずは、当館で開催した特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」で紹介したクタベ資料とその文言について見ていきたい⁽⁴⁾。その際に、一覧表(表1)を文末に掲載しているのので、併せて参照していただきたい。

(1) 摺物としてのクタベ

越中立山に「クタベ」が現れたと記されている摺物は、大阪府立中之島図書館所蔵の『保古帖』⁽⁵⁾四巻に貼られており、「倭郷」(資料①)と記されているものである(句読点は加筆、写真2)。

倭郷

唐名二而ハ件
日本二而ハクタベ

此度越中ノ国
立山薬種塚江
此クタベト申もの
出、人ニ告言
当年より四五歳之内
名も無病ニ而人多死ス。常ニ我
形図を見たるものハ、右の病難をのがれ
助る長寿すべきもの也
もろこしの件も今ハ立山に
しのむて語る神の

しらしめ

内容は、越中立山の薬種塚で「クタベ」と申すものが現れて、四、五年の内に名もわからない病にて多くの人が死ぬと告げ、自身の姿を常に見たる者はその病難から逃れられ、長寿するべき者であるというのである。

同様の資料として、同じく『保古帖』四巻に貼られている資料の中に「スカ屁」(大阪府立中之島図書館蔵、写真3)がある⁽⁶⁾。こちらには、

スカ屁

越中かき山いまき谷
尻が洞われめより
すかべと云者出て、
こやし取に告て曰ク、
今年ハ四五年の内に
名もなきおなら流行
して、いもべの薬にても
ゆかず、手にあせにぎりべ、



写真2 「倭郷」(大阪府立中之島図書館蔵)



写真3 「スカ屁」(大阪府立中之島図書館蔵)

さいごべの事有。我姿
 青ひ顔を絵図に
 うつしはりおかわ、
 其難をのがれ、
 家内まめべく、そ
 くさい延命うたがひなし。

(下の段)

どこもかもくだべ
 あんまりくだべで
 はらもくだべ、いふのも
 くだべ、あとから出す
 なをくだべ

とあり、「越中かき山いまき谷 尻が洞(の)割れ目より『すかべ』という者出て、こやし取りに告げて言うには、今年より四、五年の内に名も無き、おなら(が)流行して、いもべの薬にてもきかず。手に汗にぎりべ、最後べの事有り、我姿青い顔を絵図に写し、貼りおおくは、其難を逃れ、家内まゆべく、息災(そ、クサイ)延命疑いなし」というのである。資料①と比べると、「クタベ」が言葉の似ている「スカ尻」に変えられ、「薬種取り」が「こやし取り」、名も無き「悪病」が「おなら」へと変えられている。クタベの摺物が流行したことによって面白おかしく変えられて頒布されたものと考えられるため、資料①も瓦版として広く頒布されたものと考えられる。しかし、「スカ尻」なるものが登場するくらいに流行していたのであれば、他にもたくさんのお摺物が存在していてもおかしくないはずであるが、現状、摺物として認識している資料はこれだけである。資料の特性上、後世にのこりにくいとしても、である。しかも、これらの資料には年号がなく、いつごろに摺られたのかがわからない。

資料①の内容を改めてみると、クタベの現れた場所は「立山の薬種塚」である。では、この薬種塚は立山のどこなのか。立山関連の資料を見る限り、「薬種塚」という場所は立山登山案内図や参詣記などにも記されていない。また、「当年より四、五年の内、名も無き病にて人、多く死す。常に我(の)形図を見たる者は、右の病(の)難を逃れ助かる、長寿すべきものなり」とあり、四年か五年のうちに知られていない病で多くの人が死ぬが常に私の姿を見る者はその難(病)から逃れて助かり、長寿になるというのである。つまり、お札のように(玄関などにでも)貼りなさいというのではなく、常に私(クタベ)の姿を見ることが大切だと言っているのである。しかも、難(病)から逃れると長寿になるとも言っている。そうなると、「疫病退散」というよりも、どちらかといえば「長寿」を押ししているようにも思える。

(2) 肉筆で描かれたクタベ

湯本豪一記念日本妖怪博物館(三次もののけミュージアム)が所蔵している「越中国怪獣 クタへ」(資料②)は肉筆のもので、次のように記されている(句読点・下線は加筆、写真4)。

此度越中立山にて薬種ほり、この獣に出逢、此獣言葉を発し云ひける八人々驚へからず、我ハ此山に年久しく住むクタヘトいふものなり。今度姿をあらハす事別ニあらず。此四五年の内、何ともワからぬ病流行て、男女老若なやミテ難しらすへし。それニ付わが姿を一度ミれば、其難のかるへし。しかし諸人、我すかたをミる事、かなハす。さるによりて、今ここに姿をあらハし、かわりに見せ申なり。立降りてワかすかたを絵図にかきとり、諸人ニミせ申へし。かならず疑有へからすと云ひ、終りて失にけり。

ここでは、クタヘが現れた場所ではなく、「薬種ほり」の者がクタヘという獣に出逢ったとしているが、

この「薬種ほり」がどのような人物かは記されていない。そして、クタへは、自分の姿を一度見ればその難を逃れられるといい、すべての人が見ることができないので見ることのできない人々のために、自分の絵を描いて見せるようにと語り、「必ず疑いあるべからず」と言って姿を消したという。この資料は、「病除け」として頒布されたものとも考えられるが、摺物ではないことから、絵をかいて他の人に見せたもの一枚のようにも推測でき、広く出回ったものではないように思える。

そして、それを伺うことができるのが、所蔵者が大阪の古書市で購入した「くたへ」(個人蔵、句読点は加筆。資料③)である。此度越中立山にて薬種塚へ此クタヘト申者出入いたし告テ曰ク、当年乃四五年ノ内、名なき病にて人多ク死ス。依之我形絵図ニして見たるもの、右之病なんのがるしと申よし。右ハ松平鷲三様より此絵図を御上へ被進候由、松平遠江守様御写被遊候。依之又写之。

文政十年亥十一月下旬

とあり(写真5)、先に紹介した資料①に記されている話を記しており、摂津尼崎藩第五代藩主松平忠誨と考えられる「松平遠江守様」も松平鷲三様より進ぜられた絵(クタベの姿)を写したという。それほどクタベが流行していたことがうかがえて、大変興味深い。また、資料①や②にはない「文政十年」(一八二七)という年号が記されており、この話が流行した年がわかる貴重な資料である。ただし、ここでは資料①にあった「常ニ我形図を見たるもの」の「常に」と、病難を逃れ助かれれば「長寿すべきもの」の言葉が無くなっている。



写真4 「越中国怪獣 クタへ」
(湯本豪一記念日本妖怪博物館[三次もののけミュージアム]蔵)



写真5 「くたへ」(個人蔵)

(3) 江戸時代の随筆に書かれるクタベ

江戸時代の、流行したことなどをまとめた随筆四冊にもクタベの話が掲載されている。

『虚実無尽蔵』(国立国会図書館蔵、句読点は加筆。資料④)⁽⁷⁾の四巻には、

文政十丁亥冬諸国時行、越中立山にて薬種を掘る人に告て曰、當年より四五年の内に名も知れぬ病流行して老若ともに人多く死するなり。是に依て此図を画きて、常に見る時は其病を^(き)しけるなり、ゆめゆめうたかふへからずとてうせにけるとぞ

と記されており(写真6)、名も知れぬ病の流行を「薬種を掘る人」に告げ、クタベの絵を描いて「常に見る」とその病を避けることができるという。資料③と同様に、やはりこの話が文政十年(一八二七)の冬に諸国にて流行したとする。さらに、判読できない字がいくつかあるが、続けて「此くた

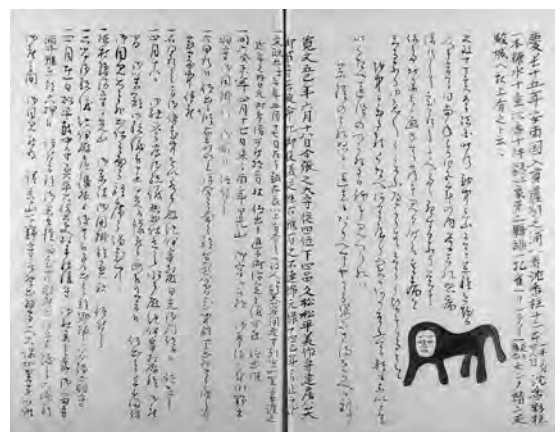


写真6 『虚実無尽蔵』四(国立国会図書館蔵)

べ医僧のつかれたる躰に見へ候れハ、薬種のとれぬに医師もた□べてや□る姿にさまをかヘル料」などと記されており、クタベが医僧の疲れた様子に見えると言っているのである。

名古屋の高力猿猴菴（種信）が記した日記の写しである『寛政文政間日記』坤（国立国会図書館蔵、句読点は加筆。資料⑤）⁽⁸⁾の文政十一年四月にも、

此頃、世間にどだくといふ物の絵図はやる。是ハ、越中国に三浦何かしといふ人、立山へ薬種を掘り行て、此物に逢ふ。此とたくか云、是乃病氣はやりて、死する者多くあらん。我姿絵を常に見る人ハ、其難除かんといふ由よしにて、是を画て張置人多し。どだくといふ文字ハ、獣かくの如き由。此画にそふ歌に、天かに神の御末の人なれいか成病ひ獣まぬかん。

とある（写真7）。「どだく（とたく）」というが、絵と内容から他の資料でのクタベ・クタへとみられる。

内容は、この頃（文政十一年〔一八二八〕四月）世間に「どだく（とたく）」という物の絵図が流行っているといい、これは三浦某という人が立山へ薬種を掘りにいき、「どだく」と出逢い、「これより病気が流行りて死する者多くあるだろう。我の姿絵を常に見る人は、その難除こう」と語ったことによるという。常に見るためなのか、この資料でのみ、どだく（とたく）の姿を書いて張（貼）り置く人が多いとある。資料③と④で文政十年の冬に流行していたことから考えると、半年経ってもなお流行していたようである。また、出会ったのが他の資料では見られない「三浦某」であったことが記されているが、この薬種を掘りに行ったという三浦氏がどのような人物なのかは不明である。

屋代弘賢（一七五八～一八四一）の手元にあった雑稿を取りまとめ、全六十冊に綴った『弘賢随筆』の第六十冊の「くたべ」（国立公文書館蔵、句読点は加筆。資料⑥）⁽⁹⁾には、

越中たて山二而此くたべ、薬種を掘りけるに、此図のこときもの出て云けるハ、当亥年乃四、五年うちに名もなき悪病流行して老若多く死すへし。一度此図を見る人、其病を除るといふ。

右図、明十四日、渋江氏の三男、本間某より得て写すもの也。

と記されている（写真8）。「亥年」とは、資料③と④から考えると、文政十年（一八二七）の「丁亥」であろうか。「十月十五日三輪正賢」とあることから、三輪正賢が提出した原稿とみられ⁽¹⁰⁾、十四日に本間某から得て写したという絵も描かれている。また、文政十年十月中旬となれば、年号がわかるものの中では一番早いものとなり、十月には江戸で流行していたと考えられる。

さらに、大郷信齋が文政八年（一八二五）から天保元年（一八三〇）までの、見聞きして面白いと思った



写真7 『寛政文政間日記』坤(国立国会図書館蔵)



写真8 『弘賢随筆』第六十冊(国立公文書館蔵)

話や事柄を虚実を問わず記録した随筆集『道聴塗説』(国立国会図書館蔵)⁽¹¹⁾にも記されている。第二十編の「流行クダベ」(句読点は加筆。資料⑦)には、

流行クダベ

越中国立山に採薬を生業とする男あり、一日山深く入て尋ね覓しに、下に圖セし如くなる山精頭れ出で、我八年久しく此山に住めるクダベといふ者なり、今年よりして三五年の間、名もなきえしれぬ病流行して、草根木皮も其效なく、扁鵲・倉公も其術を失ふべし、されど我が肖像を圖寫して一度これを見ん輩は、必其災難を免るべしと告畢て、かき消すやうに矢にけりといふ。近年流行せし神社姫の類にて、好事者の申出せし戯作一笑すべし。

と紹介されている(写真9)。採薬を生業とする男が山深くに入りて「クダベ」に出会う。そして、名も知れない病が流行するが、草根木皮も効かず、中国の医師である扁鵲や倉公もその術を失うほどの病だという。しかし、自身の肖像を図写して一度見ればその災難を免れると告げて消えたというのである。そして、大郷信斎は最後に、この話を近年流行している「神社姫」(二本の角がある人面魚)の類いだとして、物好きな人が言い出した戯作(読み物)だと自身の考えを付け加えており、「クダベ」が流行している頃と同じく疫病流行を予言する神社姫も流行っていたことがうかがえる⁽¹²⁾。



写真9 『道聴塗説』下(国立国会図書館蔵)

以上、クダベ関連資料を紹介した。そのうち、資料①と②を見比べると、「長寿」という言葉がなく、出会った場所「薬種塚」と出会った人「薬種掘り」の違い、「常に見る」と「一度」の違い、しかも「見ることができない人のために絵を描いて知らせるように」といくつか表現が違っている。資料①と資料②のどちらが先に流行したのかは判然としないが、資料③・④・⑤・⑦に絵を写していることや、資料⑥と⑦で「一度見れば」とあることから、資料①より資料②の内容のほうが拡散していたように思える。そうすると、クダベの予言が流行したのは、資料①の摺物よりも資料②で絵を写す人たちが多くなったため、諸国で語られたからではないかと考えられる。また、四冊の随筆(資料④・⑤・⑥・⑦)には、それぞれの著者が自身の考えや関連する情報を加えており、おもしろい。「絵を張り置く」としている資料は資料⑤のみであったり、どのような人物であったのが判然としない薬種掘りとして「三浦某」と記してあったりして、流行の様子やクダベを考える手掛かりとなりうるからである。

2. 「クダベ」と「件」と「白澤」

今回のクダベ人気の中で、「クダベの本当の姿はどのようなものか？」という質問が一番多かったように思う。立山博物館では、「はじめに」でも紹介したクダベ模型や缶バッジなどのグッズ類を含め、特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」でもキャラクターとしたクダベは『奇態流行史』⁽¹³⁾の挿絵を使用している(写真10)。「これに特別な意味があるのか？」と聞かれると、その答えは「私の一番お気に入りのクダベだから」である。そのため、もし特別な意味を持たせる必要があるとしたら、私の直感にも近い、クダベへの信心だっ

たのかもしれない。

しかし、それとはまた別に、名前が似ていることから「件（クダン）」と同一ではないか、また、水木プロダクションによるクタベの姿から「白澤（ハクタク）」ではないか、という「クタベは件？白澤？」論争である。そこで、同一視される「件」と「白澤」についても紹介しつつ、ここでは先述した「クタベ」の資料①～⑦よりクタベの姿に注目してみたい。

まずは、資料①のクタベの姿である。老いた男性のような顔に、背に目が二つ描かれ、手足の爪が伸びているフサフサしたような体で描かれている。当て字とみられる漢字「倭獺」も、「久」と「田」に人の顔を表す人偏をつけ、「部」に体が獣というのを表す獣偏をつけていることから、顔が人、体が獣と字でも表現しているのである。そして、初めに「唐名二而ハ件、日本二而ハクタベ」、最後に「もろこしの件も今ハ立山にしのみて語る神のしらしめ」と記されており、唐では件（クダン）と言い、日本のクタベと同一のものとしている点は注目すべきところである。

その「件」の姿として、徳川林政史研究所が所蔵している「件（「大豊作を志らす件と云獣なり）」（句読点・下線は加筆。写真 11）を挙げると、

大豊作を志らす 丹後国与謝郡何某板
 件と云獣なり

天保七申十二月丹後の国
 倉橋山の山中に凶の如く
 からだハ牛、面は人に似たる
 件といふ獣出たり
 昔 宝永二年

酉の
 十二月二も
 此件出、其翌年方
 豊作打つゞきしと古き

書二見へたり、尤件といふ文字ハ
 人偏ニ牛と書て件と読す也。至て心正直
 なる獣之故に都て證文の終にも如件と書も此由縁也

○此繪圖を張置バ家内はんしやうして厄病をうけず一切の
 禍をまぬかれ大豊年となり誠にめて度獣なり

とあり、天保七年（一八三六）十二月に丹後国倉橋山に体が牛で、面が人に似ている「件」という獣が出た（現れた）といい、宝永二年（一七七三）十二月にも出て翌年より豊年が続いたと古い書にあるという。そして、この件の絵図を貼り置けば家内繁盛し厄病を受けず、一切の禍を免れて大豊年となる誠に目出度い獣だというのである。この資料では、疫病を予言したというより絵図を張り置くことを語ったものであるが、その姿は文字通り、顔は人、体は牛である。クタベと件は名前も似ているが、現れたのが「山」という点では共通している。しかし、クタベは先述したように時期が文政十年から十一年の間と限られており、「件」のほうが知れ渡っていたと考えられることから、「件」があつての「クタベ」であつたとも言えるであろう⁽¹⁴⁾。

そして、もう一つ、クタベと同一視されているのが「白澤（ハクタク）」である。こちらは中国の神獣で、その姿は獅子に似ているが顔と脇腹にそれぞれ三つずつ、計九つの眼があり、頭に二本、背中に二本ずつ、計六



写真10 『奇態流行史』全(当館蔵)



写真11 「件」(徳川林政史研究所蔵)

本の角がある。白澤の資料が展示されている内藤記念くすり博物館刊行の『目で見るくすりの博物誌』⁽¹⁵⁾にはその功德として、「麒麟や鳳凰と同様、徳のある治政者の時に出現し、病魔を防ぐ力があると信じられていた。こうしたことから、白沢の絵を持っていれば、道中の災難や病気をまぬがれると、江戸時代の旅には欠かせない“お守り”となっていた。コレラ流行の時なども白沢の絵が売りに出され、人々はこれを身につけたという」とある⁽¹⁶⁾。富山県内では、薬や病氣と「白澤」との関連性がうかがえず、富山の売薬と白澤が結び付くかと言えば、そうでもなさそうである。

そこで、前期特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」では、立山と同じく、古くから山岳信仰が盛んであった戸隠の個人宅に伝わる「白澤避怪図」の版木を紹介した(写真12)。個人宅といっても宝光院の坊の一つ、慶乗坊遍照院であった家である。戸隠は、江戸時代には東叡山寛永寺の末寺となり、観修院を別当として奥院・中院・宝光院にそれぞれ衆徒がおり、中院と宝光院は御師の機能を果たすようになり、戸隠派山伏や天台寺院をも管轄していた。そして、文化九年十一月(一八一二)の「中院普賢院等宛新版御影広布出入裁断状」⁽¹⁷⁾から、遍照院が白澤の像を二枚配布していることがうかがえるという⁽¹⁸⁾。この版木には、白澤の姿とともに漢籍などから引用した白澤の効能を記した文章があり、もし解怪を要するなら、白澤の図を堂屋の上に掛ければ、妖怪があっても災いにならないと記してある。ただし、この白澤は疫病流行の予言はしていない。

それに対して、水木しげる氏は『妖鬼化』⁽¹⁹⁾の「^(ママ)倭部」の中で、「江戸末期、越中(富山県)の立山に倭部という怪獣が出現した。その姿は人間の牛で、腹部の両横にも眼があったという。(中略)ところで倭部は、どうやら古代中国に一度だけ出現したという白沢という聖獣と同類であるらしい」と述べており、なぜだかクタベの姿を件や白澤の姿と混合して考えている。白澤を「悪鬼妖魔による災いから逃れる知識を伝えた聖獣」とし、「漢方薬の守護神とされ、あるいは一部で信仰されてもいる。倭部が越中に出現したというのも、有名な富山の薬売りと関係があるのだろう」としていることから、疫病流行と薬、さらには富山の薬売りを結び付け、白澤と同一視してしまったというのが正しいのかもしれない。

これらを踏まえて、資料に描かれているクタベの姿へと戻ろう。資料①の姿は、「唐名にては件」としつつも、背中に目があるところから確かに白澤の姿に影響を受けているとも言える。それでも、資料①の「件=倭郷」のように、クタベと白澤を同一と記す資料は見つかっていない。資料③は独特な姿であり、「体が獣」と言えるかどうかとも不思議な絵であるが、背中らしきところに目が二つ、手足に爪のようなものもあり、やはり資料①との関連性はうかがえる。

しかし、資料②では、顔は人であるが、髪が長く、女性のような姿である。同様に、資料⑤、資料⑥、資料⑦も、髪の毛を長く描いている点から見て女性のものであり、資料②を簡略したように思える。そして、資料④はさらに髪の毛を簡略化した姿と考えられる。

以上のことから、クタベの姿は、資料①において文章では「件」と同一としつつも、背中に目を描いていることから「白澤」を意識したものと考えられ、それは旅のお守りとしてたり、コレラ流行の時に白澤(沢)の絵が売られたり、戸隠で護符として配布されていたことからクタベに何らかの影響を与えたのではないかと考えられる。しかし、諸国で流行したクタベの姿は、資料④～⑦の随筆に描かれた姿から資料②をもとにしたものとみられ、文言同様にやはり資料①より資料②から流行したと言えそうである。



写真12 「白澤避怪図」(個人蔵)

3. 「クタベ」が現れた越中立山

それでは、「はじめに」で述べたように、なぜ「クタベ」が現れたとされたのが「越中立山」であったのだろうか。

前期特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」の開催準備中、この疑問に納得のいく答えが出せずにいた。そのような時、加藤基樹氏より「立山曼荼羅に描かれる畜生道の姿に似ている」との指摘を受けた。確かに、立山地獄は平安時代にはすでに京の人々に知られていたのである⁽²⁰⁾。そして、畜生道は死後の行き先の一つで、牛や馬などに生まれ変わって本能のままに生きる世界であり、立山衆徒が立山信仰を布教する際に使用したといわれる「立山曼荼羅」のほとんどにも描かれている。

特に、芦峯寺大仙坊所蔵の「立山曼荼羅」大仙坊B本や、芦峯寺福泉坊旧蔵の「立山曼荼羅」稲沢家本（個人蔵）、芦峯寺泉蔵坊所蔵の「立山曼荼羅」泉蔵坊本、芦峯寺日光坊が所蔵していたと考えられる「立山曼荼羅」坪井家B本（個人蔵）など、いくつかの「立山曼荼羅」の畜生道には、顔は人、体は牛や馬という姿で描かれている（写真13）。また、三河国西尾藩の第四代藩主である松平乗全が制作して芦峯寺宝泉坊に寄進した「立山曼荼羅」宝泉坊本（個人蔵）や三河国岡崎藩の第五代藩主・本多忠民が寄進した芦峯寺吉祥坊旧蔵の「立山曼荼羅」吉祥坊本（当館蔵）、芦峯寺の衆徒と関係すると考えられる三重県鳥羽市の大江寺旧蔵の「立山曼荼羅」大江寺本（当館蔵）など、立山以外で制作されたと考えられる「立山曼荼羅」にも、顔は人、体は牛や馬という畜生道の姿が描かれているのである（写真14、15）。

さらに、岩峯寺延命院に伝わり、「立山曼荼羅」の絵解きの種本（台本）ともいわれる『立山手引草』（岩峯寺延命院蔵）の畜生が原での話に、

また、左方を「畜生原」と言て、中古奥州板割坂より藤喜の丞と申す者、愚痴にして地獄あることも疑え、極楽と言うことも信ぜず、因果廢無の者なるがゆえに、この所にて生きながら畜生道へ墮ち、駒となり、あまつさい角おえ、その身は畜生原へ放さる。角は御宝物となる。

あるいは同国、安方が殺生の報いによりて、火の雨降りて身にかかり、苦しみも、この所なり。

また越中の国、森尻の知明と申す僧、檀主諸共に登りしが、信施を恣にせし罪によって、これもこの所にて罪業を顕わして、生きながら牛となりたり〈これ等の事、『三才図絵』『妻鏡』『善知鳥』等に見えたり。但し大同小異〉。と記載されており、因果廢無の藤喜の丞と申す者が畜生道に墮ちて「駒」に、森尻の知明と申す僧が自身の在業により「牛」になったというのである。そうすると、立山山中には地獄があると語られるとともに、罪を犯した人間は牛や馬といった畜生に変えられるという話も語られたということである。「顔が人、



写真13 「立山曼荼羅」大仙坊B本の畜生道
(大仙坊蔵)



写真14 「立山曼荼羅」吉祥坊本の畜生道
(当館蔵)



写真15 「立山曼荼羅」大江寺本の畜生道
(当館蔵)

体が獣」という妖怪がいる場所として、人が畜生として生まれ変わる立山ならば信じられたとも言えよう。

クタベ資料のうち、大阪府立中之島図書館所蔵の資料①が貼られた『保古帖』は「千差万別の古文書・摺物等数百点を貼雑したものの称」⁽²¹⁾とあるがその多くは大阪周辺のものであろうし、資料③は摂津尼崎藩第五代藩主と考えられる人物の話である。また、資料⑤はもとは名古屋の高力猿猴菴が記した日記であり、資料⑥と資料⑦は江戸での噂話を記したものとみられ、そのうち、江戸や名古屋近辺では、立山衆徒の布教勧進活動が行われていたことが現存資料からもわかっている。立山衆徒によって、立山の神仏の世界を描いた「立山曼荼羅」とともに立山の話聞いた者ならば、人が犯した罪によって牛や馬などの畜生となりうる立山を「不思議な世界」として感じたとしてもおかしくはない。

そしてもう一つ、私に衝撃を与えたのが、「ヨゲンノトリ」と呼ばれる頭が二つある鳥の描かれた、山梨県立博物館所蔵の「市川村暴瀉病流行日記」である(写真16)。山梨県立博物館の説明によると、安政五年(一八五八)に長崎で発生した暴瀉病(コレラ)が七月に江戸へ到達し、同月末に江戸幕府直轄地であった甲斐国の甲府城下にも蔓延しており、この様子を目の当たりにした山梨郡市川村の名主であった喜左衛門が見たままを日記として書き記したものであるという⁽²²⁾。そして、

如圖なる鳥、去年十二月
加賀國白山ニあらわれ出て
申て云、今年年八九月の比、
世の人九分通死ル難有、依テ
我等か姿ヲ朝夕共ニ仰、信心者
ハかならず其難の(が)るべしと云々

是
熊野七社大権現御神武
の鳥ニ候旨申傳
今年八九月至テ人多死ル
事、神邊不思議之御つけ成



写真16 「市川村暴瀉病流行日記」のヨゲンノトリ(山梨県立博物館蔵)

とあり(句読点・下線は加筆)、図にある鳥(鳥、カラス)が去年[安政四年(一八五七)]十二月に加賀国白山に現れて、「来年の八、九月ごろに世の中の人九割方死ぬという難あり、よって我らの姿を朝夕に仰ぎ、信心する者は必ずその難を逃れることができるであろう」と申したという。そして、これは熊野七社大権現のすぐれた武徳をあらわす鳥だと言っている。

同じく、白山に現れた予言を告げる鳥について、藤川整齋が江戸市中の風物や風説について記した『安政雑記』⁽²³⁾(国立公文書館蔵、句読点は加筆。写真17)にも記されているという。

○安政四年丁巳
此度加賀国白山ニ
両頭の鳥出申候るハ
世の人九分死の難
あり。依之、我姿を朝
夕見るときは其難義
を逃る事也。我ハ熊野
権現の使なりとぞ。

此節世上聞分流行、我人共ニ此図を写すなり。

とあり、やはり、安政四年(一八五七)に加賀国白山に現れた両頭の鳥が「世の人九分死の難」を告げたことにより、



写真17 『安政雑記』(国立公文書館蔵)

世の人はこの図を写したというのである。さらに、名古屋市蓬左文庫所蔵の『鶏肋集』（写本）の安政四年の巻にも記されているようである⁽²⁴⁾。つまり、立山のクタベ出現と同様、江戸や甲斐国の人々が白山に対して「両頭の鳥」が現れてもおかしくない場所として捉えられていたと考えられないだろうか。クタベ資料が江戸や大坂、名古屋周辺の人々の噂話を記していることを考えても、遠く離れた人々によって立山や白山が神秘的な世界と認識され、そこに未知の疫病を告げる「不思議な妖怪」がいると考えられたように思えるからである。

4. 越中立山の「薬種」とクタベ

全国で人気となっているアマビエについて記されている「肥後国海中の怪(アマビエの図)」（京都大学附属図書館所蔵、句読点・下線は加筆。写真18）⁽²⁵⁾には、

肥後国海中江毎夜光物出ル所之役人行
見るニ、づの如之者現ス。私ハ海中ニ住アマビエト申
者也。當年より六ヶ年之間、諸国豊作也。併
病流行、早々私ヲ写シ人々ニ見セ候得と
申て、海中へ入けり。右へ写シ役人より江戸江
申来ル写也。
弘化三年四月中旬



写真18 「肥後国海中の怪(アマビエの図)」（京都大学附属図書館所蔵）

とあり、肥後国（現在の熊本県）の海中に光るものがあり、これを見ると図のような者が現れたというのである。そして、

「私は海中に住むアマビエと申す者なり。當年より六ヶ年の間諸国豊作なり。併せて病流行、早々に知らし写し、人々見せなさい」と申して海中に入ったという⁽²⁶⁾。アマビエは疫病だけでなく、諸国の豊作をも予言しており、これは先に紹介した「件」でも同様であった⁽²⁷⁾。

それに対して、越中立山のクタベは「疫病流行」のみを予言している。しかも、その相手が薬種を掘りに来た者であったことに注目すると、立山の薬種（薬の原料）と疫病除けを関連付けた話であるとも考えられ、クタベの一番の特徴として、出会った場所（疫病流行を告げた場所）が「薬種塚」であり、予言を告げた人物が「薬種堀り」であることが挙げられよう。しかし、立山関連の資料を見る限り、「薬種塚」という場所は立山登山案内図や参詣記などにも記されていないことから、このクタベの話にやはり、立山衆徒や立山信仰ゆかりの寺社との関わりは考えにくい。そこで、「越中立山の薬種」がクタベの話に取り入れられている点に次に注目したい。

立山博物館では、「越中立山の薬種」に関する歴史や動向について、これまでも、本草学（中国に発した薬物に関する学問）の展開と立山との関わりを紹介した「立山に奇草を求めて—富山藩薬品会を通して—」（平成十一年度特別企画展）⁽²⁸⁾や「かがやく天産物—時代を越える立山ブランドを求めて—」（令和元年度後期特別企画展）⁽²⁹⁾、文化・文政期以降の加賀藩領内における薬草の生産と消費の活発化と統制をめざした政策を中心に立山で採取された薬草の都市部への流通までの道筋を探った「薬草と加賀藩—立山から百味筆筒への道を探る—」（平成二十年度秋季特別企画展）⁽³⁰⁾などで、その調査研究の成果を紹介してきた。

特に、享保七年（一七二二）と享保十六年（一七三一）の幕府採薬使の越中派遣は、それまであまり調査されず、立山で知られていなかった薬草の存在など植物相の実態を明らかにした面もあった。彼らの多くは、調査の内容について「採薬（使）記」と名付けた記録を作成しており、また享保七年（一七二二）の内山村（現：富山県朝日町）の十村が書き残した留書『薬草御用一卷留』（富山県立図書館中島文庫蔵）など、派遣に関する地方文書等からもその規模、採薬を行った場所をうかがうことができる。

その様子として、見分には必ず採薬使一人につき道案内一人、薬草見習一人が付くことが決められており、見習人は単なる助手ではなく、その土地での薬草名称や山中の植生などを尋ねたり、薬効や利用法などの本草の知識が教授されたりしたという⁽³¹⁾。また、薬草見分では、採集した薬草は移送を前提として根ごと掘り取り、根に土をつけたまま菰や油紙で包み人足を使って運び出し、駒場や小石川の薬園へ移植する目的があるため、見分の場所へは掘り出した薬草を梱包・移送する資材や籬竹、筵、葎などが大量に持ち込まれ、それを運ぶ人足も必要であったことから享保七年（一七二二）には百人を超える動員があったともいうのである⁽³²⁾。もしかすると、クタベが出会ったという「薬種掘り」とは、このような作業に携わっていた者たちに重ねられたものであったのであろうか。

さらにその後、徳川吉宗の命を受け、本草学者・丹羽正伯は全国各地の産物の分布情報を必要と考え、享保二十年（一七三五）閏三月から四月にかけて、諸藩に対して産物帳作成を命じている。そして、全国各地の山野で調査が行われたことで、山中の様子が知られてくる。加賀藩も、享保二十一年（一七三六）四月に、高島金左衛門、行山伝左衛門を主附とする「産物調方」を算用場内に設置し、そのもとで多くの産物調査をおこなった結果、元文三年（一七三八）に『郡方産物帳』を作成している。また、この調査の関係で、加賀藩の本草学者である内山覚順と杉谷文左衛門が越中の加賀藩領内でおこなった実地調査の結果を享保二十一年にまとめており（『越中所々見分仕候品々書上帳』⁽³³⁾）、立山の薬種（薬草）について地元の村々の情報を得るとともに、幕府や加賀藩、本草学者の知識が村々へ伝えられることになったという。加賀藩もまた、立山を重要な産出地になりうると考え、薬草の分布に関心を寄せたのである⁽³⁴⁾。その証拠に、文化十年（一八一三）には村井又兵衛長世を主附とする産物方を設置し、『加州産物帳』『能州産物帳』『越州産物帳』を作成させている⁽³⁵⁾。

もう一つ大きな動きとして、本草学者たちが薬草への関心を抱いて立山へと訪れていることが挙げられる。令和元年度後期特別企画展「かがやく天産物一時代を越える立山ブランドを求めて一」で紹介した畔田翠山、山本溪山も、それぞれ、立山の薬草に関する書物を残している⁽³⁶⁾。畔田翠山は、文政五年（一八二二）に加賀国白山に赴いた際に立山にも登ったようで、『白山草木志』と『立山草木志』を記し、採集した植物を腊葉腊にして保存したものが現存している。山本溪山は、嘉永四年（一八五一）に立山で薬草調査を行っており、その時の行程を『入越日記』に記し、採集した植物や鉱物の絵図は画帳にまとめている。

このように、「立山の薬種」についての情報が広がるにつれて、漠然と「立山に未知の疫病に効く薬種があるかもしれない」という期待へとつながる一因になったとみられる。

そしてまた、立山衆徒たちの諸国檀那廻りにおいて「霊薬」を持参したことが知られている。佐伯幸長氏も『立山信仰の源流と変遷』の中で、「定宿に対しては立山の妙薬『熊胆』をおみやげに贈るのである。これは大峰山の『ダラニスケ』と同様のもので、黄柏と蓬を熟煮して練りあげたもので、現在も富山売薬で売り出されている。そのほか『トウヤクリンドウ』を陰干しにした『三効草』なども持参したのである」と記している⁽³⁷⁾。加賀藩が文久三年（一八六三）に産物方役所を再開し、集荷・管理を行うまでは、新川郡内、特に立山山中の薬草採集について、地元の村々に許可を与え、採薬を積極的に認めていたことを考えると、立山衆徒が持参した薬は立山産のものであった可能性が高い。

そうすると、「立山＝薬種（薬草）の産地」として期待を持った人々は、立山をその産出地として疫病流行を予言するクタベと結びつけられていったことが考えられる。

おわりに

富山県内での「立山ゆかりのクタベ」人気に伴い、本稿では越中立山に住む（現れた）というクタベについて、令和元年度前期特別企画展「立山ふしぎ大発見！？」で紹介した資料七点を中心に改めて考察してみた。

まず、それぞれの資料に記された文言を見比べると、資料①ではクタベの現れた場所は「立山の薬種塚」

であり、四年か五年のうちに知られていない病で多くの人が死ぬが常に私の姿を見る者はその病難から逃れて助かり、長寿になるというのである。つまり、御札や護符のように貼りなさいとは言ってはおらず、常に私（クタベ）の姿を見ることが大切だと言っている。しかも、難（病）から逃れると長寿になるとも言っており、「疫病退散」というよりも「長寿」を強調しているようである。それに対して、資料②の文言には、「長寿」という言葉も出会った場所も記されておらず、予言を告げた人物として「薬種堀り」とし、「常に見る」から「一度」へと変更され、しかも「見ることができない人のために絵を描いて知らせるように」と表現が違っている。資料③・④・⑤・⑦では人々が絵を写しており、資料⑥と⑦では「一度見れば」とあることから、資料②の内容のほうを記している人が多いように思える。

描かれたクタベの姿を見ても、資料①では老いた男性のような顔に、背に目が二つ描かれ、手足の爪が伸びているフサフサしたような体で描かれているのに対して、資料②では顔は人であるが髪が長く、女性のような姿である。資料⑤・資料⑥・資料⑦も髪の毛が長く描いている点から見ても顔は女性のように、資料②を簡略したように見え、資料④も同様である。つまり、摺物の資料①よりも、資料②で絵を写す人たちが多くなり、諸国で語られて流行したと考えられる。ただし、多くの人に知らすためには、瓦版としての摺物のほうが効果的だと考えると、資料②のようにクタベを描く人が多くなり、噂話をする人も多くなり、流行に伴って資料①が摺られたという可能性もある。

そして、クタベの一番の特徴として、「越中立山」に住む（現れる）ことであり、出会う場所は「薬種塚」であって、予言を告げる人物は「薬種堀り」であったことが挙げられ、疫病流行と「越中立山の薬種」を結び付けようとしているように感じられる。

クタベと同一視されている「件」について、湯本豪一氏が『日本幻獣図説』⁽³⁸⁾で「件の予言は決して違うことがないことから、江戸時代の証文の最後に『如件』と記すのは、そこに書かれた内容に相違なく、それを必ず守るという意味だという説明がなされることがあるくらいだ。薬の商標に件の姿を用い『如件』と書かれたものもあり、これなども間違いなく効能がある薬だとアピールしている広告といえよう。それくらいに件の予言は違うことはないという話は浸透していたのである」⁽³⁹⁾と紹介しているように、薬の効能をアピールするために「件」が商標として使用されることもあったと考えると、「薬種塚」に現れたクタベと「件」が同一視されるのも理解できる。また、「件」と同じとしつつも、描かれたクタベの姿に背中に目がある点で「白澤」の影響が見られるのは、「白澤」もその姿を描いた絵を持っていれば道中の災難や病気からまぬがれると信じられたことにあったからとみられる。このように、クタベ、件、白澤が混合してはっきり区別できないのは、資料にクタベの体がどのような姿なのか明記されていない上、それぞれの功德に大きな差がみられないからかもしれない。

しかし、クタベの話に越中立山が選ばれた理由としては、立山衆徒たちの布教勧進活動によって立山への信仰心が芽生え、そこから生まれた立山に対する神秘性と未知の世界への期待感が広まったことが考えられる。それは、山梨県立博物館や国立公文書館などの所蔵資料から、立山のクタベ同様、江戸や甲斐国の人々が白山に対して「両頭の鳥が現れてもおかしくない場所」として捉えられていたことからもうかがえ、立山や白山を神秘的な世界と認識し、そこに未知の疫病を告げる不思議な妖怪がいると信じられたように思えるからである。

立山の場合、立山衆徒たちによる布教勧進活動が活発に行われるにつれ、「立山曼荼羅」に描かれた立山の神仏のいる世界に対して信仰心が生まれていき、「救われる世界」として感じた人々はいははずである。その上、クタベが流行した時代は、「立山の薬種」に関心を示した人物たちがおり、彼らの調査やその成果である書物によって「立山＝薬種（薬草）の産地」と考えられるような情報が広がっている頃である。立山衆徒とはまた違う、学者や知識人が越中立山と薬種を結びつけ、「未知の疫病にも効く薬種があるかもしれない」という期待によって、疫病流行を告げる他の妖怪では見られない「薬種塚」や「薬種堀り」といった文言が取り入れられたと考えられる。

それにしても、山梨県立博物館と国立公文書館所蔵の資料で、加賀国白山の両頭の鳥をなぜ白山の神仏ではなく、「熊野権現の使い」とするのかと考えると、白山の宗教者ではない人物が語ったのではないかと思えて興味深い。またそれとは別に、『北國新聞』⁽⁴⁰⁾などに掲載された石川県立図書館史料編さん室の石田文一主幹のお話に、「体の一部が白くなる鳥として描写されていることから、双頭の鳥はライチョウではないか」として、「遠目で見えた絵師が二羽の鳥の姿を写生したとしても不思議ではない」というのがとても興味深い。実は私自身、白山の「鳥」としてまず浮かんだのが、やはりライチョウであったのである。立山の産物に興味・関心を抱いた本草学者たちも、立山や白山でライチョウのことを記している。そうすると、越中立山には、牛の仲間であるニホンカモシカが生息しているおり、このニホンカモシカを見て「クタベ!？」と思った可能性も考えられるのではないかとも思えるのである(写真19)。これについては、越中国放生津(四方浦)に出現した「人魚」(宝暦七年[一七五七])や「悪魚」(文化二年[一八〇五])が、害をあたえる存在から寿命長久や悪事災難を逃れる存在へと変化していることや、これがリュウグウノツカイではないかと言われていることから考えてみたいと思う⁽⁴¹⁾。



写真19 立山博物館かもしか園のニホンカモシカ

また、本稿作成中に、湯本豪一記念日本妖怪博物館(三次もののけミュージアム)の伏見由希学芸員からご教示いただいた「ぐだべ」とする資料⁽⁴²⁾には、画(絵)を常に見るだけでなく、「なといるの草をとりてもち(餅)につきたべる人ハ其災をのかく事神のことし」とあり、文言の変化についても考えていく必要がある。

新型コロナウイルス感染症という未知の病によって多くの方に知られた「越中立山のクタベ」だが、江戸時代も文政十年(一八二七)から文政十一年(一八二八)という、ほんのひと時の流行だったようで比較する資料がまだまだ少ない。さらなる資料の新出を期待しつつ、今後も立山の不思議な伝説の生まれた背景と併せて調査を続けていきたいと思う。そして、「越中立山のクタベ」に興味を持っていただいた方々には、この機会にぜひクタベが出現したという「立山」へ訪れていただき、その魅力と神秘性を実際に体感してもらえればと思うのである。

【附記】

本稿作成にあたりまして、大阪府立中之島図書館、国立国会図書館、徳川林政史研究所、山梨県立博物館、湯本豪一記念日本妖怪博物館(三次もののけミュージアム)、加藤基樹氏、笹方政紀氏、伏見由希氏、宮本和好氏、武藤洋子氏より、資料提供及び資料掲載の許可、資料情報をいただきました。

また、立山と薬種については、立山を中心に本草学についての調査研究に長年取り組まれ、「立山に奇草を求めて一富山藩薬品会を通して一」(平成十一年度特別企画展)や「かがやく天産物一時代を越える立山ブランドを求めて一」(令和元年度後期特別企画展)を開催された吉野俊哉氏にご教示いただいた。

ここに記して、皆様に御礼を申し上げます。

【註】

- (1) 立山博物館展示館のエントランスホールにて展示中のクタベ模型は、令和元年度前期特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」開催において、当時、当館の学芸員であった加藤基樹氏が「立体にしてみよう」と計画し、手作りしたものである。クタベの大きさについては、どの資料にも記されていないため、立山博物館のキャラクターとした『奇態流行史』(註13)のクタベの絵を参考に、加藤氏が「立山で出会ったら驚く(であろう)大きさ」にしている。前期企画展終了後、模型の撤去も考えたが、来館者からの評判が大変良かったため、エントランスホールで継続して展示することになり、現在に至る。
- (2) 本来「霊獣」という表現はなく、令和元年度前期特別企画展のタイトル「立山ふしぎ大発見!？」にあわせて、クタベに

「不思議感」を出すために考えた表現である。

「妖怪」について、『日本民俗大辞典』下巻（株式会社吉川弘文館、二〇〇〇年四月刊）には、「不安や恐怖をかりたてる不可解な出来事や不思議な現象、またそうした現象をもたらすと考えられている超自然的な存在。（中略）妖怪のほかにも、お化け・化け物・変化^{へんげ}・あやかしなどいくつもの呼び名があり、それぞれに異なる意味合いを帯びているが、必ずしも明確に区別されているわけではない。」とあり、クタベも本来は「不思議な現象をもたらすもの」として「妖怪」に含まれる。

- (3) 3月下旬より、富山県内の放送局や新聞社、企業などからの問い合わせ、協力依頼があった。さまざまな商品にクタベのイラストが使用されたほか、立山町立図書館、立山黒部貫光株式会社、富山きときと空港など富山県内の施設で紹介された。
- (4) 富山県〔立山博物館〕令和元年度前期特別企画展『立山ふしぎ大発見！？』展示解説書（富山県〔立山博物館〕、令和元年七月十三日刊）を参照。同書に掲載したクタベ資料とクタベ関連の研究論文については、「クダンと見世物」（東アジア恠異学会編『怪異を媒介するもの』、勉誠出版株式会社、二〇一五年八月刊、一〇〇～一一四頁）や「転写する呪い—クタベの新史料から—」（『怪 KWAL』）などを執筆されている笹方政紀氏（東アジア恠異学会会員・御影史学研究会会員）にご教示いただき、大変お世話になった。
- (5) 『保古帖』については、大阪府立図書館の司書であった長友千代治氏が『保古帖』全二十巻は、昭和二十二年に本館（※大阪府立図書館）に受入された記号甲雑五八の貴重書である。『保古帖』とは厚冊の台紙に、千差万別の古文書・摺物等数百点を貼雑したものの称である。本書の成立は第一巻の資料に附された識語からして、嘉永四年当時に初度の編集があり、その後浪華の古書肆鹿田静七氏の手へ渡って更に増加編集され、製本されたものである」（長友千代治「資料紹介その一六 保古帖—延宝六年大坂町盡—」、大阪府立図書館報『難波津』NO. 一六所収、大阪府立図書館、昭和三十八年九月刊）と紹介している。
- (6) 註5に同じ。資料①と同ページの上下に貼り付けられている。
- (7) 題箋には「虚実無尽蔵」とある。内容を要約すると、「越中立山にて薬種を掘る人がいうには、当年より四、五年のうちにも名も知れない悪病が流行して老若ともに人が多く死ぬなり。是によりて、この図を描きて常に見る時はその病を避けるなり。ゆめゆめ疑うべきでないという消えてしまったという」とある。
- (8) 全十一冊あり。冊子ののど部分に「大野屋惣八」とあり、名古屋の貸本屋であった大野屋惣八が所蔵していた、高力猿猴菴（種信）の日記の写しとみられる。ただし、クタベが紹介されている文政十一年（一八二八）には「文政十一年戊子略日記 猿猴菴種信」とあり、また十一冊目の終丁裏には「尾浪越 高力猿猴菴種信／享年七拾四歳 自画之」と記されている。
- (9) 国学者で、江戸幕府の書役として登用された屋代弘賢（一七五八～一八四一）の手元にあった雑稿を取りまとめ、全六十冊に綴ったものである。原稿の大部分は、毎月十五日に弘賢の知友が持ち寄った文章を披露する「三五会」に提出された原稿である。クタベについては、第六十冊の中に「くたべ」として記されている。
- (10) 同書には、クタベ以外にも三輪正賢が提出したとみられる原稿が綴られている。
- (11) 本編二十五編、続編十編からなる。国立国会図書館蔵の『道聴塗説』は、大郷信斎（名は良則、字は伯義。一七七二～一八四四）が江戸での噂話を集めて記したものの写しで、上下二冊になっている。
- (12) 「神社姫」とは、二本の角を生やして長い髪を持ち、尻尾が三本の剣となっている。海から出現して疫病（コロリ）流行と七年間の豊作を告げ、自身の姿を見れば難を逃れられるという予言獣の一つ。文政二年（一八一九）二月七日に肥前国平戸浜で、同年四月九日に肥前国葦野浜で揚がったとする肉筆資料がある。また、年号が記されていないが、越後国新潟の浜辺に揚がったという資料もある（すべて、湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）所蔵）。詳しくは、湯本豪一著『日本の幻獣図譜—大江戸不思議生物出現録』（株式会社東京美術、二〇一六年七月刊）、七六～七七頁を参照。
- (13) 『奇態流行史』全（宮武外骨編集兼発行、半狂堂、大正十一年七月一日刊）、富山県〔立山博物館〕所蔵。同書は、宮武外骨が流行っていたものをまとめたもので、本書の編纂発行の動機について、例言に「一月下旬、『幸運の為に』といふ葉書が流行して居るのを見て、大正の今日、ヘンな事が流行するものである、此社会心理如何など考へた事から、古来の奇態な流行を集めれば、興味あるものが出来るだらう、と思ったのが始まりで、それから二月上旬より、徐々に材料の蒐集に着手したのであった」とある。そして、宮武外骨が奇態な流行の一つとして「悪病除けの人獣絵」を蒐集し、『虚実無尽蔵』（資料④）をもとに記している。
- (14) 「件」は、『総合日本民俗語彙』第二巻（株式会社平凡社、昭和三十一年九月刊）に、「牛の子で人語を解するもの。その

いうこと一言は正しい。よつて件の如しという俗説を生じている。いまも九州・中国地方では時折り聞く。生れて四、五日しか生きていない。多くは流行病や戦争の豫言をする。」と説明されている。

徳川林政史研究所蔵の資料のほか、佐藤健二『流言蜚語—うわさ話を読みとく作法』(株式会社有信堂高文社、一九九五年三月刊、一四八～二〇九頁)や湯本豪一『日本幻獣図説』(河出書房新社、二〇〇五年七月刊、六六～七〇頁)など、これまでにたくさんの先学者によって研究、紹介されており、それに併せてクタブ資料が紹介されることも多い。

- (15) 内藤記念くすり博物館『目で見えるくすりの博物誌』(一九八二年十二月刊、一九九〇年五月改訂)、七頁。
- (16) 湯本豪一『日本幻獣図説』(河出書房新社、二〇〇五年七月刊、八九～九一頁)に、明治十三年(一八八〇)七月二十四日の『北陸日報』の記事から、「白沢が災難や疫病除けだけにとどまらず、狐狸の憑依などの病を治すための幻獣として信仰されていたことが窺われ、多くの白沢の刷物が作られたことがみてとれる。地元で白沢の図をもっているという家(※金沢区小立野新坂町一番地温泉所 森方作が所持していたとみられる)の噂が広がり、新聞ネタにまでなったのであろう。記事は、白沢を信仰する者はその家に貰いに行くようにと結ばれているが、これは白沢図を制作して頒布していたことを意味するものであろう」と紹介されている。
- (17) 『長野県史』近世史料編第七卷(三)北信地方、長野県編(長野県史刊行会、昭和五十七年三月発行)、八三八～八四〇頁。
- (18) 熊澤美弓氏の「信州戸隠宮本旅館蔵白澤避怪図の図像的検討」(『信濃』第六三卷第七号所収、信濃史学会、二〇一一年七月刊)、五六八頁。同論文内で、内藤記念くすり博物館所蔵の「白澤避怪図」と比較し「版木の複数の存在を指摘することができ、版木が複数必要になるほど刷られ、頒布されたことが考えられる」ことや、遍照院が戸隠御師として活動していたことなどから「戸隠御師として活動する中で白澤の札を配布していたと考えられる」ことを指摘している。その他、熊澤美弓「戸隠御師と白澤」(東アジア恠異学会編『恠異を媒介するもの』、勉誠出版株式会社、二〇一五年八月刊)、一五九～一六三頁参照。
- (19) 水木しげる『妖鬼化』2 中部編(株式会社ソフトガレージ、二〇〇四年一月刊)、六〇頁。資料①からいうと、正しくは「倭郷」であるが、原文のまま「倭部」と記す。
- (20) 平安時代の書物『大日本国法華経験記』や『今昔物語集』にも、「立山地獄」に堕ちて苦しむ女性の話が紹介されている。
- (21) 註5を参照。
- (22) 森原明廣「江戸時代の古文書に再注目—コロナの時代とヨゲンノトリ」(『博物館研究』vol.55 No.11 通巻630号、公益財団法人日本博物館協会編集発行、二〇二〇年十一月刊所収)を参照。
- (23) 『安政雑記』は、剣術師範を務める藤川貞(号は整斎)著。全十六冊あり。国立公文書館のデジタルアーカイブで公開されており、閲覧・画像のダウンロードができる。
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/M1000000000000034033>
- (24) 『鶏肋集』は、名古屋市蓬左文庫の資料情報によると、安井重遠の写しで、江戸時代末期、全二十三冊。原資料は未調査。平井隆太郎氏の「かわら版の謎を探る」(『太陽コレクション5「かわら版・新聞」江戸・明治三百新聞 I 大阪夏の陣から豪商銭屋五兵衛の最期』、株式会社平凡社、一九七八年二月刊、四六頁)によると、安政四年(一八五七)の巻に「このたび加賀国白山へ両頭白首の鳥出て人言のごとく云ける。当年、世の人九分死するの難あり、よって我がかたちを画き日々見るときは難をのがれん、必ず疑ふ事なかれ、こは熊野大権現御告なりとて飛去ぬ」と記されているようである。
- (25) 「肥後国海中の怪(アマビエの図)」は、京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて公開されており、閲覧・画像のダウンロードができる。
https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/iiif/RB00000122/RB00000122_00085_0.ptif/full/2000,/0/default.jpg
- (26) 「肥後国海中の怪(アマビエの図)」にはさらに、役人が(その姿を)写して江戸へ申し来る写しだとあり、この話が弘化三年(一八四六)の四月中旬だとする。
- (27) 西尾市岩瀬文庫で紹介されている「姫魚図」(京都にあった奇談研究会「以文会」の議題を記録した『以文会随筆』に収載、文政六年、水野皓山編)は、肥前の平戸の浜(長崎県)に現れ、七年以内にコロリ(コレラ)が流行すること予言したという。このように疫病流行を告げる予言獣がいるとともに、「件」や「尼彦」、「神社姫」、「亀女」などといった豊作と疫病流行をセットで告げる予言獣もいる。湯本豪一『日本の幻獣図譜—大江戸不思議生物出現録』(株式会社東京美術、二〇一六年七月刊)などを参照。
- (28) 富山県[立山博物館]平成十一年度秋季特別企画展『立山に奇草を求めて—富山藩薬品会を通して—』展示解説書(富山県[立山博物館]、平成十一年十月二日刊)参照。
- (29) 富山県[立山博物館]令和元年度後期特別企画展『かがやく天産物—時代を越える立山ブランドを求めて—』展示解説書(富山県[立山博物館]、令和元年九月十四日刊)参照。

- (30) 富山県 [立山博物館] 平成二十年度秋季特別企画展『薬草と加賀藩—立山から百味筆筒への道を探る—』展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成二十年九月二十七日刊）参照。
- (31) 註29に同じ。『かがやく天産物』展示解説書の二三～二七頁。
- (32) 註29に同じ。『かがやく天産物』展示解説書の二三～二七頁。
- (33) 『享元塵余志 二』所収、金沢市立玉川図書館所蔵（加越能文庫）。
- (34) 註30に同じ。『薬草と加賀藩』展示解説書の三一頁。
- (35) 嘉藤潤一「加賀藩の薬草政策と立山」（平成二十年度秋季特別企画展『薬草と加賀藩—立山から百味筆筒への道を探る—』展示解説書所収、富山県 [立山博物館]、平成二十年九月二十七日刊）に詳しい。
- (36) 註29に同じ。『かがやく天産物』展示解説書の二八～三〇頁。
- (37) 佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、昭和四十八年九月刊）、三一二頁。
 同書にはまた、諸国檀那廻りについて、「先づいつ頃から起ったかといえば明確な史料はないので、よく判明しないが他の霊山の状況史料から推して、大体室町時代の文明明応の頃から勃興し、諸山とも追々発展して江戸時代の初期頃までに一応の形が整ったのではなかろうか。延宝や元禄頃には幕政の整備で団体旅行も可能となり、御師僧侶の旅行もそんなに不安ばかりではなくなってきて師檀関係の発展も見られたと思う。特に寛政文化文政と幕末に近づくにつれて爆発的に飛躍したことは一山史料を見ても充分判明するし、何よりも芦峯寺の坊の整正されてゆく過程で、はっきりうかがえる」（三〇九～三一五頁）と述べている。
- (38) 湯本豪一『日本幻獣図説』（河出書房新社、二〇〇五年七月刊）、六六頁。
- (39) 湯本豪一『日本の幻獣図譜—大江戸不思議生物出現録』（株式会社東京美術、二〇一六年七月刊）の三七頁には、痔薬の広告「如件」（『満州日日新聞』昭和一年一月二日八日 [二七日夕刊]）が掲載されており、痔薬の効能を列記し、件の腹部に「如件」と記されていることについて、「薬が必ず効くということの象徴」と紹介している。
- (40) 『北國新聞』（朝刊）、二〇二〇年七月二十八日発行。二八頁。
- (41) 越中国放生津に出現した「人魚」（宝暦七年 [一七五七]）や「悪魚」（文化二年 [一八〇五]）の資料があり、船の往来などに害をあたえる存在として、松平加賀守の家来などによって退治されたとある。しかし、文化二年（一八〇五）の「人魚図」には、「此魚を一度見る人は寿命長久し悪事災難をのがれ一生仕合よく福德幸を得るとなり」と加えられており、内容に変化が見られる。さらに、こういった越中国放生津の人魚について、湯本豪一氏は、「この人魚のもとになったのは、この地方で稀に捕獲されるリュウグウノツカイなる巨大な深海魚ではないかともいわれている」（『日本幻獣図説』、河出書房新社、二〇〇五年七月刊、四三～四四頁）と紹介しているのである。
- (42) 『Monstres et prodiges dans le Japon d'Edo』（Alain BRIOT、2013）所収。原資料は未調査。この資料は、田安德川家旧蔵の『献英楼画叢』の一部である四冊のうちの一冊である。『東京大学史料編纂所報』第40号（東京大学史料編纂所、2004）によると、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所のクレットマン・コレクション（寄託資料、一部は一時借用分）は、フランスの第二次陸軍顧問団員であり、一八七六—七八（明治九～十一年）に来日したルイ・クレットマン工兵中尉（一八五一—一九一四）のもので、クレットマンが東京で入手し持ち帰った「貼込帳」四冊も含まれている。そのうち、『献英楼画叢拾遺 八集三』（表紙に「う二ノ三」ともあり）の前半に「災異」として異獣の図などの摺物が貼り込んである（文化・文政～天保期のもの）という。フランスの同書に掲載された表紙の写真をみると、その中に「具多遍」（ぐたべ）があり、その後ろに「白山両頭鳥（鳥カ）」として白山に現れた両頭の鳥の摺物が貼り込んであるようである。

表1 クタベ資料一覧

	資料①	資料②	資料③	資料④	資料⑤	資料⑥	資料⑦
資料名	「侷郷」	「越中国怪獣 クタヘ」	「くたへ」	『虚実無尽 蔵』四	『寛政文政問 日記』坤	「くたべ」 (『弘賢随筆』第 六十冊に所収)	「流行クダベ」 (『道聴塗説』第 二十編に所収)
形態	摺物 (一枚物) 多色刷り	肉筆 (一枚物)	肉筆 (一枚物)	冊子	冊子 (写し力)	冊子	冊子 (写し)
著者 (制作者)	不明	不明	不明	不明	高力猿猴菴	屋代弘賢	大郷信齋
年号	なし	なし	文政10年 (1827) 亥 11月下旬	文政10年 (1827) 丁亥の冬	文政11年 (1828) 4月	亥年 (10月15日に三 輪正賢が提出 した原稿)	なし
予言獣の 名称	侷郷、 唐名は件	クタヘ	クタヘ	くたべ	どだく とたく	くたべ	クダベ 山精
現れた場所	越中ノ国立 山の薬種塚	越中立山	越中立山 薬種塚	越中立山	越中国立山	越中たて山	越中国立山
告げた人	人	薬種ほり	なし	薬種を掘る人	薬種を掘る 三浦某	薬種を掘り けるとき	採薬を生業 とする男
予言した 内容	四、五歳の 内に名も無い 病で人が多く 死すこと	四、五年の 内に何とも わからない病 流行、男女老 若なやむ	四、五年の 内に名なき 病にて人多く 死すこと	四、五年の 内に名も知 れぬ病流行、 老若ともに 人多く死す こと	これより病 気はやりて、 死ぬ者多く あるであろ う	四、五年う ちに名もなき 悪病流行、 老若多く死 すこと	三、五年の 間、名もなき えしれぬ病 流行
除難の方法	常にくたべ の形図を見る	クタヘの姿 を一度見る	クタヘの形 を絵図にし て見る	くたべの図 を画きて常 に見る	どだく(とた く)の姿絵 を常に見る	くたべの図 を一度見る	クダベの肖 像を図写し て一度これ を見る
その他の 特徴	「スカ尻」と いう摺物も 制作される	薬種ほりに 姿を描かせ、 諸人に見せ るよう告げ る	松平鷲三よ り松平遠江 守へ進上、 絵を写す	ゆめゆめ疑 うべきでな いと言って 消える	絵を画きて 張り置く人 が多いとあ る	くたべの絵 は、本間某 より得て写 したもの	近年流行し ている神社 姫の類で好 事者の戯作
描かれる姿	老いた男性 のような顔。 背に目が2つ あり、手足の 爪が伸びてフ サフサしたよ うな体。	髪が長く、 女性のような 顔。丸みのある 体。	背中らしき ところに目が 2つ、手足に爪 のようなもの がある。	顔は人だが 髪がない。 (文言より) 医僧のつか れたる躰に 見るとあり。	髪が長く、 女性のような 顔。丸みのある 体。	髪が長く、 女性のような 顔。丸みのある 体。	髪が長く、 女性のような 顔。丸みのある 体。
資料の 所蔵者	大阪府立 中之島図書館	湯本豪一記 念日本妖怪 博物館 (三次もののけ ミュージアム)	個人	国立 国会図書館	国立 国会図書館	国立 公文書館	国立 国会図書館